

「おのくん」が伝える人と人の繋がり

矢嶋 諒 早稲田大学人間科学部人間環境科学科 1 年(早稲田大学系属早稲田実業学校高等部卒)

目 次	
I はじめに	1
II 調査概要	2
III 「おのくん」がつないだもの	3
i おのくん誕生前夜	4
ii 被災者とソックモンキーをつなぐ	5
iii ボランティアの人たちと東松島の人々をつなぐ	6
iv 全国の人たちと東松島の人々をつなぐ	6
v 新しい世代へ”しんさい“をつなぐ	7
IV まとめ	8
V 時系列	9
VI 参考文献	10

I はじめに

2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震¹が原因となって起きた東日本大震災から 11 年が経過し、震災経験の風化が早くも始まっている。その為、未曾有の震災被害や経験を伝えていくための様々な活動が各地で行われている。しかし、私は震災経験を伝えていく上で重要なことは「復興」を通じた町おこしといった将来への希望に焦点を置くことだと考える。こうした活動は実際に事例があり、陸前高田の「瓦 Re：KEYHOLDER²」などが挙げられるが、中でも非常にユニークな活動として広まっているのが「おのくん」である。東松島市の震災復興の中で生まれた「おのくん」は、単なる震災復興支援としてのアイテムではなく、「人と人を繋ぐきっかけ」として、日本の様々な地域の人と被災地をつなげる役割を担ってきた。この点に注目しながら私は取材を進めた。

¹ 東北地方太平洋沖地震：2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に発生した太平洋三陸沖を震源とした地震。地震の規模は M9.0(気象庁)で国内観測史上最大規模であった。
² 瓦 Re：KEYHOLDER：被災地で山積みになった瓦礫から生まれた陸前高田の復興支援アイデア商品。

「おのくん」の始まりは東日本大震災後の2012年3月中旬、小野駅前応急仮設住宅に埼玉県在住のボランティアの方が訪れたことによる。このボランティアの方が当該仮設住宅に住む子供に「ソックモンキー³」をプレゼントしたことが発端であった。そのソックモンキーを見た武田文子氏(2011年11月に発足した「小野駅前郷プロジェクト⁴」の代表であり、当時の小野駅前応急仮設住宅の自治会長)や、集会所にいた人たちが心惹かれ、小野駅前応急仮設住宅の人々の故郷である奥松島の復興を願って生み出したキャラクターである。当時、この地域は被災により、これまでの穏やかな生活から一変し、先の見えない状況になっていたが、それでも自分たちの手で新しい未来へ向かっていこうという思いが込められている。



図1 おのくん人形(一例)



図2 「空の駅」の駅内

「おのくん」の活動の中で特に注目したポイントとしては地域との密接な関係といった独特なコミュニティ形成が挙げられる。「つなぐ」ことの大切さを説く当団体の活動の原点を知り、未来を見据えた「東日本大震災」「復興」をみていきたいと考えた。「つなぐ」という言葉は非常に重要であり、多くの意味が含まれている。当団体が考える「つなぐ」に注目しながら、当団体が「3つのかんきょう」に着目して活動を進めていく意味や活動の根幹をみていければと考えている。そして現在行われている「おのくん」をシンボルとしたまちづくりの活動は、自治体を中心ではなく住民が中心となっている点にも注目していく。

II 調査概要

私は2022年8月22日に、おのくんの“実家”である「空の駅プロジェクト」宛にメールにてインタビューの依頼をし、9月9日14時に空の駅にて代表の武田文子氏、新城隼氏にインタビューをさせていただくことになった。新城氏からは震災以前より、東京でボランティアなど多くの取り組みを行ってきた際の話を、武田氏からは震災経験を伺った。また、おふたりから今後の「空の駅」の活動と震災の伝承・震災復興について伺った。そして再度、確認のため、11月12日に空の駅にて再取材を行った。

※インタビューの最中の武田氏と新城氏のコメントはできるだけ、語り口そのままで表記している。

〈取材相手概要〉

-武田文子氏-

空の駅プロジェクト代表

元東松島市小野駅前地区応急仮設住宅自治会長



-新城隼氏-

小野駅前郷プロジェクト代表

空の駅プロジェクト代表

株式会社 social imagine 代表



図3 取材場所である「空の駅」

³ ソックモンキー：1930年代に流行した米国のソックモンキーが起源。使い古された靴下を使ってぬいぐるみを作っていた。

⁴ 小野駅前郷プロジェクト：2011年11月に宮城県東松島市小野駅前応急仮設住宅の集会所で立ち上げられた団体。

Ⅲ 「おのくん」がつかないもの

当初「おのくん」の一番の目的は「奥松島・東松島」を知ってもらい、現地でしか知れないことを知るために足を運んでもらうことにあると考えていた。当時、東北を応援する「NEVER FORGET TOHOKU⁵」の俳優達が主催している東京の銀座の画廊で東松島の写真をするなど、東松島を応援してもらう活動に新城氏らが参加していたところ、東松島の物産展の話が持ち上がった。そこで東松島の復興に向けて動き出している企業や、各地区の仮設住宅でものづくりをしている方々のものを持ち寄り、毎月土日に銀座で「チーム東松島・東北物産展⁶」として販売する活動が始まった。

多くの人々が東北・東松島の応援になると考え、物産展は賑わった。しかし実際に東松島を訪問するまでには至らなかった。そこで仮設住宅で作っているソックモンキーを販売せず展示して、物産展の会場内で「(ソックモンキーが)ほしい人は東松島の仮設住宅(小野駅前仮設住宅)までお越しください。」とアナウンスし、人々に注目してもらうようにした。東松島の復興を支援したいと思う人はこの人形を欲しいと思って、東松島に来るのではないかと考えたのである。その結果、実際に置き始めて3ヶ月目に東松島の小野駅前仮設住宅まで足を運んでくれた方々が現れ始めた。現地に行かなくては手に入らなかったものを手にした喜びは非常に大きく、SNSを使っている人は、「おのくん」の写真を投稿し、拡散していった。これが大きな影響を及ぼし、東松島に多くの人が足を運ぶようになり、さらにSNS投稿が増えていった。もともと多くのボランティアが訪れていた東松島の仮設住宅により多くの人がソックモンキーを目当てに訪れるようになり、東松島を知ってもらう機会が増えていった。

そのうち、ソックモンキーを持って再び東松島を訪れる人が増えた。すると「これは販売活動ではなく、里親募集だね」という話がおのくんと手にしてくれる人たちとお母さんたちの中で出始め、ソックモンキーを持って東松島に来ることは、「里帰り」と呼ばれるようになった。販売ではなく、「里親募集」ということにすると名前を決める必要性が出てきて、小野駅前仮設住宅で誕生したことから「おのくん」とすることに決まった。当時、ボランティアで東松島に訪れていたNHKアナウンサーの小野文恵氏が、集会所を訪れた際にお母さん達の口癖であった「めんどくしえ」の言葉を聞き、「めんどくしえ人形」とも命名したため、正式名称は「めんどくしえ おのくん」となった。

復興が進み、小野駅前仮設住宅が閉鎖されると、小野駅前郷プロジェクトはクラウドファンディングで集めた資金で陸前小野駅前に新たに「空の駅」を設置し、そこを活動の拠点とした。空の駅ではさまざまな挑戦をしており、現在は「3つのかんきょう」や「のりうどん⁷」の展開等をしながら、東松島を多くの人に紹介し、東日本大震災を知らない世代にどのようにわかりやすく伝えていくかなどを考えながら、伝承活動も行っている。「3つのかんきょう」とは「環境」「感教」「間協」と表現している。「見て、触れて、考えてひとつひとつ学んで行こう」ということをおのくんを通じて子供達に知ってほしいということを訴えている。「挑戦」することの素晴らしさを伝えていくための活動の一つとして展開しており、また「つながり」で生まれるものを知ってもらうことを目的としている。

⁵ NEVER FORGET TOHOKU：柴俊夫、松崎しげる、田中健、西田敏行を中心に融資の俳優や著名人の協力で結成された復興支援プロジェクト。

⁶ チーム東松島・東北物産展：復興支援のために有志個人の集まりである東日本大震災サポートチーム「Social TOUR」が行ったイベント。

⁷ のりうどん：宮城県東松島市大曲浜海苔漁師の海苔を生地に練り込んだ海苔の風味を感じることができるうどん。東日本大震災の2年後に復活した。



図 4 「空の駅」で提供しているのりうどん

しかし現在は新型コロナウイルスの影響で「つながり」を作りにくい環境になってしまっている。おのくんの里親募集開始当初とは変わって、コロナウイルス発生後は、おのくんの里親募集をインターネットや SNS を使って呼びかけるようにもなったが、空の駅でも里親を受け付けている。そしてさまざまなつながりを目的に、より多くの人におのくを知ってもらうために、宮城県に関係のある団体などとのコラボなどを行うようになった。コラボの例としては、アニメ「名探偵コナン⁸」や「航空自衛隊 ブルーインパルス⁹」がある。

i おのくん誕生前夜

新城氏は震災前当時、“田舎¹⁰”には都心では考えられない困りごとがあることを学び、その際に出会った SNS を活用することで(人と人を)「つなぐ」ことができると考えていた。“田舎”と都会を繋ぐ事業の立ち上げをしようとした際に 3.11 を経験した。この時、新城氏が考えていた事業は“田舎”の土地活用、空き家活用といった「余り物」を使い、困りごとを解決することを目指すものであった。新城氏は“田舎”ならではの良いものを PR していきたいということを当時は考えていたようだ。

新城氏：(“田舎”ならではのといえば)食べ物とか。“田舎”で農家さんが作ってる野菜とかね、お米とかそういうものを食べる機会があると全然おいしいっていうものとか、新鮮なものを食べるとかっていうことと、体にいいとかっていうことだったりとかで、都会だとそのオーガニックなものとかって買おうと思ってもめちゃくちゃ高い。だけど“田舎”に行ったらゴロゴロあるよ。でも“田舎”の人は逆にそれを喜ばれるとは思ってない。

武田氏は 3.11 当時、旧鳴瀬町野蒜地区に住んでおり、庭先の畑や田をいじるといった穏やかな生活を送っていたが 3.11 によって全てが変わった。武田氏は津波に流されかけるといった危険な状況も経験し、3.11 の被災者となった。新城氏は東京で、武田氏は旧鳴瀬町野蒜地区でそれぞれの場所で 3.11 を経験した。そこで新城氏はすぐに支援のため支援団体「Social TOUR¹¹」の発足を行った。

新城氏が実際に東松島に入ったのは 2011 年 5 月 5 日のことであった。その際に復興開始の象徴として花火を 1 万発打ち上げる計画を思いつき、行動を始めた。その当時のことを新城氏はこう語っている。

新城氏：当時はクラウドファンディングの存在は知らずにクラウドファンディングみたいなことを勝手にオリジナルでやってた。東松島に来て、(活動の)拠点を置かって決めた震災の 2011 年に東松島で打ち上げ花火 1 万発をあげるっていうプロジェクトをやったんですよ。その募集をウェブ上で、まさにクラウドファンディングみたいな感じで、何々の花火いくらみたいな、勝手に値段つけて、それで募集をしてっていうのをやったんです。それは 2011 年にやってるんで、震災からスタートして 5 月 5 日の日に初めて東松島に来て、そこで(地元の)「のりうどん」を作ってる

⁸ 名探偵コナン：1994 年に刊行が開始された青山剛昌原作の漫画作品であり、1996 年からアニメ化が始まった。おのくんとのコラボは 2019 年 1 月 12 日の放送である。

⁹ ブルーインパルス：航空自衛隊に所属する曲技飛行隊の愛称名である。主な基地は松島基地のため、東松島市は「空と海のまち」とも呼ばれている。

¹⁰ 田舎：新城氏のインタビュー上で“地方”を“田舎”と表現していたため、そのまま表記した。

¹¹ Social TOUR：町の復興や再生に向けて尽力している人々に寄り添い活動することで継続的に行動できる一つのモデルケースを示す団体。

ちゃんこ屋の親方と出会って、その時に偶々「お祭りできるかわかんないけど、遊びに来い」という話になって、何やるのと聞いたら「中身何もないんだよね」みたいな。「花火が上がったら子供たち喜ぶかな」みたいなことを言ったので、「じゃ、僕らが花火あげたら喜ぶかな」みたいな。そういう話で別にその花火って、そんな大層な花火と(当初は)思っただけでなかったんですよ。初めは普通の店で売っている花火でも大量にあげれば、それはそれで 1 つのアレンジにもなるかな(と)思ったり。どんなもんだろうとか、花火の知識もないですから…。そういうのをやろうとして、Twitter で「1000 発の花火ってどうなの」みたいなのをつぶやいたら、「しょぼ」って、帰ってきて。そこで「1 万発の花火ってどうなんだ」ってあげたら、“あげる”ってつぶやいていないのに、「1 万発の花火上げるらしい。すげえ」ってなって、うわあと拡散しちゃったんですよ。ということは、1 万発の花火あげるということはすごいことなんだな、世の中の人結構驚くようなことだったらみんな喜ぶことなんだなというので、じゃ 1 万発の花火を上げるプロジェクト¹²を立ち上げようとなって。ネット上でもともとホームページ作ろうとしてたのをちょっと変更して、オリジナルの募集サイトを勝手に作ってやったというのがきっかけですね。

ii 被災者とソックモンキーをつなぐ

新城氏は多くの仮設住宅を回る中で小野駅前応急仮設住宅を訪れ、当時、自治会長をやっていた武田氏と出会った。

武田氏：仮設住宅に入ってから、皆さん暇で暇でやることもなくてね。今まで庭先とか畑とか田んぼあったけど、何も今なくなって仮設(住宅)に入ってる時、みんな暇してたのよ。それでみんなでお茶飲みしても 3 日ぐらいすれば飽きるしね。それでなんか作るものないのって言いながら、いろんな物を模索しながら 1 年ちょっとかかったんですけど、たまたま仮設住宅の子供さんにソックモンキーですか、それを趣味で作ってる方が埼玉にいて、それを仮設(住宅)にいるお子さんに送ってくれたのね。それを私に見せてくれて。靴下いっぱいあるもので、できるんじゃないのって話。あ、そうだねって話で、それでその人に連絡をとって「すみません。お金がないので自力で指導に来ていただけませんか」ということで埼玉から来ていただきましたね。それが 2012 年の 4 月 20 日。そこから始まってます。

この活動が「小野駅前郷プロジェクト」の始まりとなった。武田氏のインタビューにもあったように 2012 年 3 月中旬に埼玉県在住のボランティアの方から「ソックモンキー」をいただき、4 月 20 日にきていただいて、作り方を教わって、おのくん第一号が生まれた。当時は 1 日かけて作っていたそうである。武田氏らは、ソックモンキーを作ることで、被災した非日常と将来の不安を少しだけ和らげることができたようである。

¹² 1 万発の花火を上げるプロジェクト：支援団体「Social TOUR」が復興推進協賛企画として行ったプロジェクト。

iii ボランティアの人たちと東松島の人々をつなぐ

当時、全国から被災地にやってきたボランティアは土砂撤去作業¹³が中心で仮設住宅付近には近づくこともほとんどなく、作業場所と宿泊先の往復が大半であった。武田氏はボランティアの人たちと仮設住宅に住む人たちの交流が必要だと考え、当時、集会所に必ず誰かいる状況にしていた。3ヶ月くらい経つと仮設住宅を訪れるボランティアが増え始め、その中のボランティアの方々から、「ソックモンキーが欲しい！」という声が聞こえ始めてきた。そこで全国から復興支援でやってくるボランティアの方達の手に渡し、「おのくん」が全国に広まっていった。

iv 全国の人たちと東松島の人々をつなぐ

復興支援ボランティアは復興作業が終了するとともに、仮設住宅には来なくなった。そうすると東松島市にも人がやってこなくなってくる。実際に新城氏は感じていたことがあった。

新城氏：ボランティア活動してる時に…。辛いつていうか、そんなもんかなと思って僕は SNS を武器に、ボランティア活動してたんですけど、僕自身は東北に入り込んでしまったんで。そうすると板挟みというか、現地の人が感じてることと、支援してる人が感じてることというのが、ちょっとずれるというか。支援してる人がやってあげているというか、今もありますけど物資届けたら、「写真撮って送ってください」と。それ震災当初だったら「じゃ食べ物もらったから、じゃ喜んで写真とか撮らせてください」とかは言えないよ。せっかく物資届けてあげてるのに「なんで撮ってくれないんですか」みたいな。「いや届けてあげているというか、僕は代理で持っていつてるだけで」みたいな感じだったので、それがやりたかったら自分で持っていつてという感じでした。もちろん、そこまで言わなかったんですけど。そこで私は団体として、こっちの人を向いてる人とそうでない人で分けたんです。そしてあんまり直接話をしないように、SNS に関して僕個人の発信は減らしたんです。

復興支援ボランティアと被災地の結びつきは、このように一方通行であり、やがて交流もなくなると考えた。そのため東松島の魅力を伝える物産展の開催を進め、同時にどうすれば 3.11 を伝えていけるのかという震災の伝承を新城氏は考えてきた。この物産展でも「東松島を魅せつけよう」をコンセプトにして、その中の一つで「おのくん」を紹介し、「現地でなければ入手できない」ことを伝えたとこ、「おのくん」を目当てに東松島を訪れる人が少しずつ増えてきた。こうして「おのくん」を手に入れた人たちは、違った種類のおのくんを手に入れるため、再び空の駅を訪れるようになった。そのとき正式に名前が「おのくん」となり、「里親」、「里帰り」といった表現も自然と生まれて、東松島市と全国の「おのくん」の里親さんとの双方向のつながりが形成された。全国の里親さんは個人の SNS で「おのくん」を紹介しはじめ、それらが「おのくん」を知らない人たちに注目されて、より多くの人たちに拡散され、「おのくん」を目当てに東松島を訪れる人たちが増えていった。

¹³ 土砂撤去作業：震災で発生した災害廃棄物を撤去して、復興の後押しをする作業のこと。

v 新しい世代へ”しんさい“をつなぐ

東松島を盛り上げる目的の他に「おのくん」の活動は 3.11 を知らない世代に 3.11 を伝える目的も持っている。武田氏や新城氏の努力もあって「おのくん」はさまざまな繋がりを通じて全国的な活動に発展してきた。実際に震災を伝えて行くのに「おのくん」は非常に重要な役割になってきたのだが、活動を続けていく上で、新城氏はある課題に直面したことを語ってくれた。

新城氏：実際、武田さん達を見て、「おのくん」は必要なんだろうなっていうことを感じた部分ではあるんですけど。武田さんのお話って要は津波で流されたりとか実はすごい経験をしてるんですよ。流されて車の中に閉じ込められてみたいところとか、そういう話をたまにすると、普段はしないんですけど、それ聞いた人と大人たちが「講演会で喋ってください」というの

が、いろんなところで行われて何度も何度も話していったら、子供たちにも聞いてほしいみたいなことが起こり出して子供たちの前でもその話をしたりするんですけど、やっぱり重すぎるというか、子供たちがポカンとしたりとか、もうついてこれなくなったりというのが、話してる間中見えて、これってどうなんだろうなみたいに思ってるところに着ぐるみ(でっかいおのくん)もできたんで、講演会というか、喋ってドヨンってしてる中に、急に終わった瞬間に着ぐるみがボンって出てきて、ワ～とかなって、ワ～キャ～とかなりつつ、でももうドヨンとしてる子もいたりとかして、何しに来てんだろ、みたいな。こうやりながら違和感を感じて、「おのくん」で楽しんでもらうとか、喜んでもらうことをやって、「おのくん」の存在を知ってもらって、「おのくん」ってなんで生まれたんだろう。こう逆さまになって「あ、震災ってどこから生まれたんだ」と気づいてもらえたらいいなと思うので、心を動かすことをやろうと。なんか今起こったこととか、これまでのことを伝えていくとか。震災だからどうのこうのということは、言うのをやめようという感覚に変えて“感じる教育”という言葉に変換したんですね。興味持ってくれたら知る。勝手に調べるだろうと。なんなんだろうと「おのくん」は、どういう存在、どこから生まれたのだろうみたいになった時に、興味を持って、「こんなことがあったんだ」というのは頭に入るかなと。興味を持っていないのに、こんなすごいことがあったとか、津波から逃げなよとか言われても多分(心に)入らないのかな。実際に色々なイベントをやっていく中でそう感じたので、そういう風にしたらと感じる。あの3つの「かんきょう」ってのはもうその通り。3つの(“かんきょう”に)して、震災がどうたらこうたらという言葉をもう一切使わずにこの言葉で表現し直す。



図1 3つの「かんきょう」活動

「おのくん」は、3つの「かんきょう」を通じて、子どもたちに「挑戦」することの大切さや「つながり」で生まれるものを伝えている。今後、東日本大震災の次世代への伝承と東松島の新しいまちづくりが持続的な活動へと昇華していくと思われる。

IV まとめ

「おのくん」は、その存在や活動を通じて、様々な人々を結びつけてきた。最初は、被災者住宅で手持ち無沙汰の被災者の人たちを「おのくん」づくりでつなげてきた。そして、次に被災地を訪れるボランティアの人たちを、東松島の人たちとつなげてきた。さらには全国の人たちを東松島の人たちにつなげる役割に拡大してきた。このように「おのくん」は被災者と被災地を応援する多くの人々をつなげるために、非常に大きな役割を果たしてきたと考える。人と人をつなぎ、コミュニティを作る良い事例であると捉えることができた。

東日本大震災では被災した当事者にしかわからないことや復興活動に深く関わった人にしかわからないことが数多くある。この調査をする前には、被災した人々が生活再建をしていくには、やらなければならないことが沢山あって、忙しくて暇もないと考えていた。しかし、インタビューをしてみると、日常生活を奪われた人たちが、手持ち無沙汰でやることもなく、ひたすら将来に対する不安をかかえている状態であることを初めて知った。また復興ボランティアの人たちも、被災者の人たちと一緒にがれきの撤去などを行っている中で、交流が生まれていくのだろうと想像していたが、実際にインタビューしてみると、接点がほとんど無いことがわかった。そのような状況だったとしたら、ボランティアがやってきて、がれきの撤去などの作業が終わった被災地には、何のつながりも残らず、ひたすら被災地域だけの復興という厳しい状況になると考える。

被災地を復興するには、被災地の人たちによるものだけでなく、全国の人たちの応援が最も大切である。そういった中で、東松島市において「おのくん」が担ってきた「被災地の人たちと、全国の人たちをつなぐ」という役割は非常に大きなものがあつた。震災と復興は時間の流れによって様々な変化が起こる。本当の復興は全国の人たちと被災地の人たちが持続的につながることによって、経済的なつながりも持続的なものになる。また時間の流れによる震災体験の風化は、防災意識を持ち、東日本大震災の体験を伝えることで防ぐことができる。今回、「おのくん」を通じて、持続可能な社会形成に必要なまちづくりの基礎とは何なのかを知ることができたと考える。何より取材をして感じたことは、東日本大震災で失うものはたくさんあったものの、その体験の中で生まれた“つながり”があつたこと、そして“つながり”の大切さである。今後も「おのくん」の活動が世代を超えて人々に伝わってほしい。

V 時系列

年	月	日	人	行動内容					
2011	3	~10	新城	東京にて SNS を使った事業の展開を目指す。	2014	8	18~19	新城	の存在が知れ渡る。ブランド名「おのくん」の誕生。
			武田	時間があれば庭先の畑や田の世話をしていた。					第7回チーム東松島・東北物産展を開催。
		11	新城	東京で3.11を経験。					つながりフェスタ2012に参加。
			武田	旧鳴瀬町野蒜地区で3.11を経験し、被災。					第12回東日本大震災映像報告会 おのくん in 岐阜
		12	新城	「Social TOUR」発足。					めんどくしえ祭2014
				小野駅前応急仮設住宅建設開始。					でっかいおのくん誕生。
	5	5	新城	東松島に初訪問。のりうどんのちゃんこ屋のおじさんに出会う。「HANABI Project」の構想が生まれる。	2015	4	18~30		おのくんとおさんぼ 写真絵本発売
				小野駅前応急仮設住宅入居開始。小野駅前仮設住宅集会所の自治会長になる。当時ボランティア活動を行っていた新城氏との出会い。					めんどくしえ祭2015
				「HANABI Project」の「ありがとう!東松島元気フェスタ!!」が行われ、1万発の花火が上がる。					「空の駅」建設
		8	武田	小野駅前応急仮設住宅入居開始。小野駅前仮設住宅集会所の自治会長になる。当時ボランティア活動を行っていた新城氏との出会い。	2016	2	7		めんどくしえおのくん おにく祭り
				「HANABI Project」の「ありがとう!東松島元気フェスタ!!」が行われ、1万発の花火が上がる。					めんどくしえ祭2016
				「小野駅前郷プロジェクト」を立ち上げる。					東松島夏祭り
2012	3	中旬	武田	埼玉県在住のボランティアの方から「ソックモンキー」を仮設住宅の子供にプレゼントしているのを見て、心惹かれる。	2017	5	4		めんどくしえ祭2017 おのくんの誕生祭
			新城	「小野駅前郷プロジェクト」を立ち上げる。					めんどくしえ祭2018 おのくんの誕生祭
			武田	埼玉県在住のボランティアの方から「ソックモンキー」を仮設住宅の子供にプレゼントしているのを見て、心惹かれる。					名探偵コナンとコラボ。
			新城	「小野駅前郷プロジェクト」を立ち上げる。					おのくんのおにくんまつり2020
			武田	おのくん「第一号」が生まれる。					コロナウイルスの蔓延でイベントを全て中止にする。
			新城	NHK 小野文恵アナウンサーによって「めんどくしえ人形」と命名される。					NFT アート企画スタート
	4	20~21~	武田	ボランティアの人たちにも人形	2022	9	9		石ノ森漫画館 ¹⁴ のシージェッター海斗とコラボ
									楽天イーグルス ¹⁵ とコラボ

¹⁴ 石ノ森漫画館：宮城県石巻市中瀬にある漫画家・石ノ森章太郎のマンガミュージアムのこと。

¹⁵ 楽天イーグルス：総称「東北楽天ゴールデンイーグルス」。本拠地を宮城県仙台市にしている。

VI 参考文献

- ・「NEVER FORGET 東北 | 3.11 を忘れない」,<<http://nf-tohoku.com/index.php>>2022 年 11 月 29 日閲覧
- ・「応援アワード 2022」,<<https://ajoen.jp/support-awards/>>2022 年 11 月 29 日閲覧
- ・「東日本大震災サポートチームソーシャルツアーSocial TOUR～手を繋ごう想いの架け橋～ 公式フェイスブック」,<<https://www.facebook.com/SocialTOUR.GINZA>>2022 年 11 月 29 日閲覧
- ・「ありがとう『東松島元気フェスタ』 in HANABI Project× 1 1 1 1 1 social TOUR 公式フェイスブック」,<<https://ja-jp.facebook.com/HANABIProject/>>2022 年 11 月 29 日閲覧
- ・「里親募集 | 東松島 | めんどくしえ おのくん - Wix.com」,<<https://socialimagine.wixsite.com/onokun>>2022 年 11 月 29 日閲覧
- ・「応援アワード 2022」での新城隼氏のスピーチより
- ・『東松島市小野地区』「宮城から感謝をこめて 2013」,<<https://sites.google.com/site/kanshamiyagi/home/higashimatsushima>>2022 年 11 月 29 日閲覧